

タブレット端末を活用した 学び合いを深める 学習指導の工夫

千葉県船橋市立
習志野台第二小学校教諭
井川 富美子

1 はじめに

家庭科では、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住に関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成すること」を目指している。この資質・能力を育成するためには、課題の発見→計画→実践→評価→改善という学習過程において「主体的・対話的で深い学び」の視点での授業改善を行う必要がある。そこで、児童の考えや、実践結果等の記録をタブレット端末に保存し、共有、可視化することで、人と関わり合いながら、学びを深める学習指導につながる考えた。

今回は、千葉県小学校家庭科研究大会船橋大会の授業を実践例として紹介する。



共有した情報から、よいと思う友だちの実践を視聴する。



友だちの実践から、よい点・改善点を話し合う。

2 実践発表

【その1】

5年「食べて元気に」－家で作ったみそ汁の発表を聞いて自分の実践を振り返ろう－（14 / 14 時間）

調理実習の反省を生かして、家庭実践した時の動画や写真をタブレット端末に記録し、授業での振り返りを行った。授業での計画やまとめは、ワークシートを使用した。

児童は、家庭での実践をクラス全体で共有し、自分が工夫したことや気付いたことをまとめて伝えた。さらに、友だちの実践発表からそれぞれの工夫を知り、これからの自分の生活に生かしていきたいという気持ちをもてるようにした。

本時の指導のポイント

- 工夫したこと、実践したことを分かりやすく発表させる（実、切り方、家族からのアドバイス等）。
- 次回改善したほうが、よいところを考えさせる。

本時の評価

- ◇おいしいみそ汁の調理計画や調理の仕方について、実践を評価したり、改善したりしている。
（思考・判断・表現力）
- ◇おいしく食べるためにみそ汁の調理計画や調理の仕方についての活動について分かりやすく表現している。
（思考・判断・表現力）

【その2】

6年「クリーン大作戦」－汚れや場所に応じた清掃方法を知り、学校や家庭での清掃に生かそう－

（5 / 7時間）

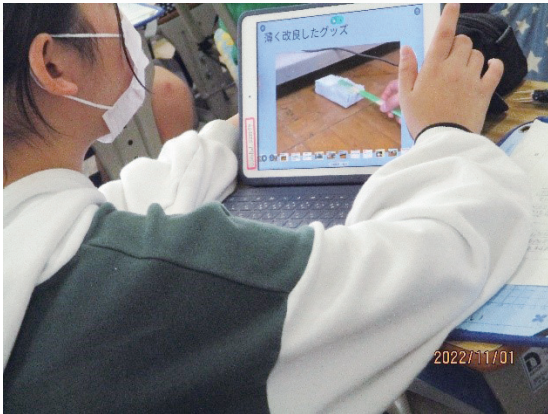
班ごとに工夫して作った掃除用具を使って清掃を行い、その実践内容を発表した。タブレット端末を活用することで、話し合いながらの発表内容の原稿作りや編集が容易にでき、短時間で作成することができた。紙面上の発表と違い、ポイントを絞り動画



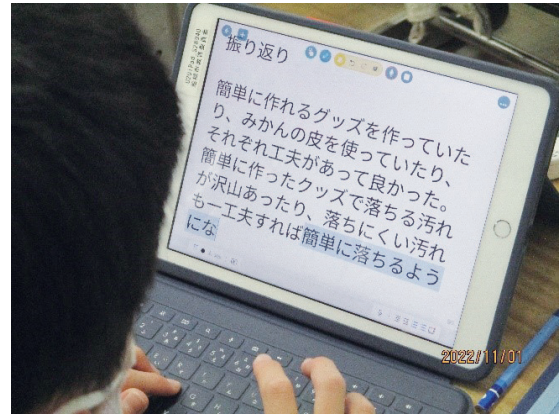
実践内容の発表の様子。「鏡の水あかの落とし方は？」



汚れている場所を確認する。



他の班の手作り掃除用具の使い方を視聴する。



学んだことや自分の考えをまとめ、クラス全体で共有する。

も加えることで、具体的に清掃の様子を他の班に知らせることができた。聞いている児童も清掃方法や実践報告を照らし合わせ、汚れや場所に応じた清掃方法について実感を伴って理解することができた。

本時の指導のポイント

- 実践報告を聞き、様々な清掃方法があることに気付かせる。
- 児童の実践報告をもとに、汚れや場所に合った清掃方法があることに気付かせる。

本時の評価

- ◇健康で快適な清掃の仕方について、実践を評価したり改善したりしている。(思考・判断・表現力)

3 まとめ

- ICT 機器を活用することで、掃除用具の動画を見て、使い勝手のよしあしについての質問が出るなど、意見交換を深めることができた。
- 家での実践で工夫したポイントを実際の写真や動画で見ることで個々の実践を学級全体で共有することができた。

4 おわりに

研究主題を「思考し、表現する力の育成～生活事象に関心をもって、自らの生活に活用できる児童の育成～」とし、研究を進めてきた。

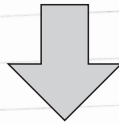
研究の視点として掲げた「他の人と関わり合いながら学びを深める学習指導の工夫」として一人1台端末の効果的な活用方法を考えた。個や班での実践発表や振り返りをクラス全体で共有することを目的としたため、ICT を使うことが目的ではなく、ICT を活用することで、限られた授業時数の中で、児童同士が伝え合い、表現する協働的な学びができたと考える。

参 考

【習志野台第二小学校家庭科 研究全体構想図】

学校教育目標
自ら学び 心豊かで
たくましく生きる 子どもの育成

校内研究における目指す児童像
意欲をもって学び 自分の考えを
わかりやすく表現する子



習志野台第二小学校 家庭科研究主題

思考し、表現する力の育成

～生活事象に関心を持って学び、自らの生活に活用できる児童の育成～

家庭科において目指す児童像

- ・日常生活に必要な基礎的・基本的な知識や技能を身に付けている子
- ・「なぜ」を大切に、課題を見つけ、工夫し解決する力を身に付けている子
- ・家族の一員として、生活をよりよくしようと実践する力を身に付けている子

研究の視点

視点1 課題を明確にし、
解決方法の見通しを持た
せる指導法の工夫

- ・「基本」である学校の学び
の観点をおさえた指導計画
- ・「なぜ」から家庭生活の課
題を引き出す指導法の工夫

視点2 他の人と関わり合
いながら学びを深める学
習指導の工夫

- ・実践的・体験的な活動充実
- ・ICTを活用した授業の工夫

視点3 身に付けた知識や
技能を活用するための、
振り返り活動の工夫

- ・学習活動を振り返り、学ん
だことや意欲を次につなげ
る工夫
- ・振り返りからの気づきや疑
問を次に生かす工夫



千葉県小学校家庭科研究会主題

家庭生活をみつめ、豊かな家庭生活を創り出す家庭科教育

—学び合い、関わり合いながら生活をよりよくなる児童の育成を目指して—

思考し、表現する力の育成

～生活事象に関心を持って学び、自らの生活に活用できる児童の育成～

1

主題設定の理由

(1) 学習指導要領の趣旨

家庭科の目標の前文に、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することを目指す。」とある。「生活の営みに係る見方・考え方を働かせる」とは、家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものである。

小学校家庭科においては、「協力・協働」については「家庭や地域の人々との協力」、「生活文化の継承・創造」については、「生活文化の大切さに気付くこと」を視点として扱うことが考えられるとしている。生活の営みに係る見方・考え方を働かせ課題を解決する力を育成するためには、子供たちが身近な家庭生活の事象をより具体的に自分事として捉え、主体的に問題を解決しようとする仕掛けが大切である。さらに実感を伴う理解を促し実践する場を増やすことで、家族の一員としての役割や地域との関わりを深めていくことができると考える。

(2) 社会的背景から

現代の社会は、グローバル化や情報機器の著しい進歩で、社会構造が大きく変化し、欲しい情報や、他人の動向等が容易にわかるようになってきている。それと同時に、一人でゲームや通信機器を使用する時間が増え、家族と関わる時間が少なくなっている。さらに、家族一人一人が忙しく、平日に家族がそろって夕食を食べたり、夕食後にそろってだんらんを楽しむという時間が取れない家庭も増えている。また、家族そのもののとらえ方も変化し、同じ

家に住みながらも「個食」のように、家族がそろって同じ食卓を囲むという行為も徐々に少なくなっている。子供の貧困やヤングケアラーなど新たな問題も生じている。

また、地域の行事は少なくなり、地域との関わりも希薄になってきており、記録的な大雨による洪水や土砂崩れ等で、今までの生活が突然できなくなる地域も年々増えている。一方、新型コロナウイルス感染症拡大防止の方策として、ステイホームやリモートワークが推奨され、以前より、家庭内で家族が過ごす時間が増え、家庭の在り方も一層多様化してきている。このような時だからこそ、改めて、生きていくために欠かすことのできない食べることや着ること、住むこと、関わり合うことの大切さを再認識する必要がある。

人生100年時代と言われているこの時代、少子高齢化社会や地球温暖化等の環境問題等、社会の急激な変化に対応できる力が求められている。今まで以上に、将来を見据えて、少しでもよりよい生活を送るための価値観と知識・技能を小学校から系統的に身に付けていく必要がある。家庭生活の事象には、状況的、科学的、歴史・文化的、心情的な理由がある。その理由について考え、調べ、理由を理解し、よりよい解決策を実践することが、急激な変化に対応する力を培うことになる。どんな些細なことでも、SDGsにつながったり、よりよい家庭生活につながったりしているということを実感させることが大切であると考えます。

(3) 習志野台第二小学校の教育と、千葉県小学校家庭科教育研究会 研究主題との関わり

習志野台第二小学校 学校教育目標

自ら学び 心豊かで たくましく生きる
子供の育成

校内研究における目指す児童像

意欲を持って学び、自分の考えをわかりやすく表現する子

「意欲を持って学び」を「生活事象に関心を持って学ぶ」

「自分の考えをわかりやすく表現する子」を「自らの生活に活用できる児童の育成」と捉えた。

千葉県小学校家庭科教育研究会 研究主題

家庭生活を見つめ、豊かな家庭生活を創り出す家庭科教育

—学び合い、関わり合いながら生活をよりよくする児童の育成を目指して—

「家庭生活を見つめ」を「生活事象に関心を持って学ぶ」

「豊かな家庭生活を創り出す家庭科教育」を「自らの生活に活用できる児童の育成」と捉えた。

2 家庭科としての見方・考え方

①自分たちの生活を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、当たり前のことを再確認し、さらに生活しやすくするための手立てを考える。

②工夫したことを、学校・家庭・地域で実践し、よりよい生活につながったかを確認し、他者に伝えていく。

この2つを基本にして、「なぜ」「どうして」「どのように」と当たり前のことを再確認し、生活事象すべてに理由があり、さらに、もっと生活しやすくするためにはどうしたらよいか、自分が実践可能なことで課題を設定し、解決策を考え、実践し、評価・検証していく。さらに課題解決に向けて、持続可能な社会を見据えながら、目的を明確にして児童が学ぶ意識を自覚させる。

3 目指す児童の姿

- ・日常生活に必要な基礎的・基本的な知識や技能を身に付けている子
- ・「なぜ」を大切に、課題を見つけ、工夫し解決する力を身に付けている子
- ・家族の一員として、生活をよりよくしようと実践する力を身に付けている子

4 研究の視点

視点1 課題を明確にし、解決方法の見通しを持たせる指導法の工夫

- ・「基本」である学習のめあてをおさえた指導計画
- ・「なぜ」から家庭生活の課題を引き出す指導法の工夫

生活経験の不足から、児童は、初めて経験すること、知ることが多くなってきている。小学校での学びが最初で最後のものもある。それだけに、教師側が何を「基本」とするかをしっかりとおさえる必要がある。学んだ「基本」を生かし、各家庭の実態に合った実践を工夫して行うことで、子供たちは、学びを深めることができる。「基本」を知ること、日本の伝統的な生活文化にも気づかせたい。

多くの児童は、毎日の家庭生活（衣食住）を当たり前のことと捉え生活をしている。「なぜそうなっているのか」「なぜそうしたほうがいいのか」疑問を持つことで、先人からの工夫や科学的根拠や理由があることを理解し、さらに普段の生活を振り返ることで、自分自身が考えたり工夫したりできる解決方法を導き出していくことが大切である。

視点2 他の人と関わり合いながら学びを深める学習指導の工夫

- ・実践的・体験的な活動の充実

・ICTを活用した授業の工夫

生活経験が未熟な児童に対しては、実際に体験することが一番の学びになる。体験の中で、方法や考え方が児童の中で違うこともあるが、安全面や基本が守られていれば、固定観念にとらわれず、それぞれの考えや感じ方を大事にして共有していく。具体的には、他の人と自分の考えの類似点や相違点を見つけることで、多様な考えを持ち、様々な角度から課題を考え、実践していくことで、学びを深める学習指導の工夫を研究する。

新型コロナウイルス感染症対策としては、一人一実習の徹底が望まれる。個の実習は、個の学びを保障し、交流を意味深いものとするところから、日常的に施設設備・教材教具を整えておきたい。しかしながら、工夫には限界があり、共同実習のほうが学習効果が高いものもある。端末の導入で音声言語だけでなく、文字言語や映像情報を活用することが容易になったことを踏まえ、例えば、交流方法については、複数の方法が考えられる。グループ内の考えを画面上で共有したり、発表することで、子供たち同士が伝え合い表現する協働的な学びの場を設定できると考える。

視点3 身に付けた知識や技能を活用するための、振り返り活動の工夫

- ・ 学習活動を振り返り、学んだことや意欲を次につなげる工夫
 - ・ 振り返りからの気づきや疑問を次に生かす工夫
- 家庭科は、今からはじまり、未来の家庭生活を安全・快適・健康で過ごすための知識や技能の基本を

学ぶ教科である。「やって終わり」「作って終わり」のぶつ切りの授業ではなく、知り得たものを実生活の中で継続し、さらに工夫していくための振り返りが大切であり、大掛かりなことでもなく、続けることで未来につながるようになることが実感できるような工夫を考えていく。そのためには、子供の思考が自然に深まるような手立てを、意図的に仕掛けていく必要がある。

さらに、気づいたことが新たな学びにつながり、疑問を解決することで今よりも快適な家庭生活が送れるよう工夫することの繰り返しから、持続可能な社会が構築されている。

これは、船橋の教育目標「自立して、主体的に社会に関わることができる子供を育成する」にもつながり、船橋の主権者教育「ふるさと船橋」への思いを育んでいく。

5 目指す資質・能力

家庭科の学習で目指す「資質・能力」は、生涯にわたって健康で豊かな生活を送るために「何ができるようになるのか」を考え、自立の基礎として必要なものである。

そのために、

支えられていた自分 → できるようになった自分
→ 家族を支えられる自分 → 地域に貢献できる自分

を目指し、毎時間の学習の中で、どんな些細なことでも大事にして、一人一人が考え、工夫し実践を積み上げていくことが、何十年後に大きな力となって、自分自身、家族、地域に還元できる資質・能力を育成していくと考える。